

ハルトマン・フォン・アウエの
「グレゴリウス」
——構成と内容——

石 川 栄 作

西田越郎先生退官記念「ドイツ文学・語学論集」

1985年8月

ハルトマン・フォン・アウエの 「グレゴorius」 ——構成と内容——

石 川 栄 作

I. 「グレゴorius」研究の方向づけ

兄と妹の近親相姦から生まれたグレゴoriusは、のちにそれとは知らずに実の母と結婚してしまう。当時の教会的教義によれば、近親相姦から生まれた子供はいかなる罪をも負わされないし、また知らず欲せずして近親相姦を犯した場合にも当事者には罪は負われないと言う。それならばなぜ、グレゴoriusは17年間もの長い期間しかも過酷な懺悔贖罪の苦行を行なうのであろうか。

この矛盾は罪の問題を取り扱う「グレゴorius」研究の出発点となったが、「民衆の意見」を導入することによってその矛盾を解決した A. E. シェーンバッハ¹⁾ に対して、その後の研究者の多くはグレゴoriusに個人的な罪を負わせることによってその矛盾を取り除いている²⁾。彼らの見解は勿論さまざまではあるけれども、大部分の研究にあてはまることを要約すれば、グレゴoriusの決定的な罪は、彼の出生の事情を知らず僧の生活を騎士の生活に換えることを自ら進んで決心したことの中にある³⁾ と言えよう。中でもいろいろな点で注目される G. シープ⁴⁾ と H. ノーベル⁵⁾ は、初期スコラ哲学的神学の専門用語から出発して、グレゴoriusの罪は、彼が知りかつ欲しつつ、象牙板に記された母の願いである代理の懺悔を避けて、傲慢 (superbia) の言いなりになった点にあるとしている。なるほど H. ノーベルが指摘しているように、グレゴoriusの人生において決定的なのは、彼が象牙板の文字によって自分の出生の事情を知る瞬間である⁶⁾ が、しかし、果たしてこの一箇所のみ罪の原因を求めてよいものであろうか。この作品において問題となっている罪は、グレゴoriusが騎士社会へ出発したときようやく問題となってくるのではなく、主人公グレゴoriusが誕生する前、すなわち、兄と妹が犯す近親相姦に端を発しているのである。世俗的名誉 (êre) を護ろうとして妹が兄の邪恋に応えて、秘密を作ってしまったことから罪の物語は展開し始めるのであり、この世俗的名誉への執着こそあらゆる罪の原因なのである。すなわち、この作品の根底には悪魔が介在しており、登場人物たちの宮廷的動機に乗じて悪魔の意志が働きかけ、それによって罪が積み重ねられてゆくのであり、グレゴoriusの行為は勿論のこと、罪の発端である母の行為に対しても同じように注意を向けなければならない。否、それどころか母の存在こそ、グレゴ-

リウスの罪の理解、ひいてはこの作品の解釈に一助となってくれるものであると言っても過言ではないであろう。なぜなら、母は、第一と第二の近親相姦においては勿論のこと、最後におけるローマでの再会場面においても必要不可欠な役割を果たしており、この作品の構成にとってはグレゴリーウスとともになくてはならない存在だからである。この母と子を中心にして全体の転換点を考えた場合、忠告が二度とも別れに通じており、その忠告も別れも近親相姦が原因である。従って、この二つの近親相姦を二つの柱として全体からその構成を眺めてみなければならない。まさにこの構成の研究こそ解釈に一つの骨格——それは早まった重心の置き換えを防ぐことができる——を提供するのである⁷⁾ と言ってよいであろう。本稿では、まずこの二つの近親相姦の構成を分析し⁸⁾、その構成の意味するところを探ることによって、この作品の内容及びこの作品の持つ意義を考えてみたい。

II. 二重の近親相姦の構成

長いプロローグのあとようやく始まる本来の物語の冒頭に置かれている父王の警告は、兄妹が近親相姦を犯したあと助言を求めることになる老騎士の登場へと通じており、単なる「前史」として片付けられてはならない。この父王の教えに従って、兄は妹を大切にし、その結果この兄妹の幸せな栄誉 (êre) のさまを悪魔が妬むことによって、物語も展開し始めるからである。この悪魔の唆かしによって兄の邪なミンネに直面した妹は、世俗的名望 (êre) を護るために、兄の邪恋に応えてしまい、兄の子供をみごもってしまう。êre のために近親相姦を犯した兄妹は、父王の教え通り、父の顧問官でもあった老騎士に忠告を仰ぐが、その老騎士の忠告もどちらかと言えば êre を護るという宮廷的な動機であり、これは母と子の別れに通じている。すなわち、生まれた男の子の運命を神に委ねて海に流すことになったのも、神への帰依からと言うよりは、象牙板の文面からもわかるように、恥辱を隠すため (ze helne daz mein, 738) という宮廷的動機によるものである。この秘密のモチーフは悪魔の奸計によって災いをもたらさずにはいない。その国にとどまった母親には、聖地へ巡礼の旅に出かけた兄の死の知らせがすぐさま届くのである。悪魔の辱しめによって神の恩寵 (hulde, 887) が奪われたそのことに大きな恐れを抱いた姫君は、兄を葬ったのち、キリストとの婚約を決意して、あらゆる求婚者をも退けつつ、神の恩寵 (hulde, 890) のために喜びと安楽を避け、まことの悔いを示して罪から免がれようとするが、その前にまたもや世俗的名誉 (êre) の誘惑に負けてしまう。この作品の根底には悪魔が潜んでおり、その作用は常に登場人物たちの宮廷的動機に乗じて働きかけるのであり、主人公たちが世俗的名声 (êre) のことを考えるや否や、またもや悪魔がその力を発揮することになるのである。

一方、極上の絹地にくるまれて、^{きんず}金子と象牙板を添えられた小箱で海に流された幼な子も、ある小島の海岸で二人の漁師によって発見され、修道院長の手で洗礼を受けグレゴリーウスと命名されるが、出生の由来のことは勿論のこと捨て子であることまで秘密のままにされる。6歳になるとグレゴリーウスは漁師の手から修道院へひきとられ、さまざまな

教育を受け、およそこの地上にあって美点と呼ばれるもののことごとくを身につけ、もろもろの美德を兼ね備えた理想の子供として描かれている(1235—75)が、その理想は15歳になったある日のこと、漁師の子供をひどい目にあわせたことから崩れてしまう。グレゴoriusはついに養母の口から自らが捨て子であることを聞き、僧院長に相談する。この島から出るように自分を駆り立てて止まぬものとして、第一の理由である養母のもたらしした恥辱(schande, 1490)のほかに、第二に自分が騎士の由緒ある家門の出であるかも知れぬということ、第三には騎士への憧れ(ze ritterschefte stât mîn wân, 1514)を挙げて、ここにグレゴoriusの騎士への憧れと僧院長の宗教的な勧めとが対立することとなるのである。

>Sun, dîn rede enist niht guot:
durch got bekêre dînen muot.
swer sich von phaffen bilde
gote machet wilde
unde ritterschaft begât,
der muoz mit maniger missetât
verwürken sêle unde lîp. <

(1515-21)

「わが子よ、その考えはよろしくない。
神を思い、考えを変えるよう努めるがよい。
聖職者への道にありながら
神をうとんじ、
騎士の生活を送ろうなどとする者は、
さまざまの過ちを犯し、
肉体も魂も滅ぼすことになるのだぞ。」

騎士への道を思いとどまり神の僕(gotes kint, 1527)として神に身を委ねよというこの修道院長の忠告に対して、グレゴoriusは騎士として神に仕える(gotes ritter, 1534)ことを主張する。

>ritterschaft daz ist ein leben,
der im die mâze kan gegeben,
sô enmac nieman baz genesen.
er mac gotes ritter gerner wesen
danne ein betrogen klôsterman. <

(1531-5)

「騎士の道を正しく行なう者以上に、
至福にいたり得る者は
ないと信じます。
いつわりの聖職者であるよりは、
騎士として神に仕える方が勝るでしょう。」

騎士の道においては何の経験もないことを取りあげて、肉体的に見ても騎士よりは僧に適していることを認めさせようとする僧院長の言葉に対しても、グレゴoriusは子供の頃から胸の中で騎士の道を学んでいることを口にして、騎士への憧れを長々と(1558—1624)語って聞かせる。グレゴoriusの騎士への憧れの強さに驚いた僧院長は、ひとまず引き止めることを断念して、かつて赤子がくるまれていた極上の絹地で騎士の衣装を作らせたが、象牙板と金貨のことは秘密のままにしておく。騎士とはなったものの財産がなければ、

安楽な生活のため少なくともこの地にとどまるやも知れぬと思ったからである。しかし、それは見当違いであった。財産はなくとも、幸運は労苦によってかちとられうる（1686—1710）し、またそうできれば、親から多くの財産を受け、しかもそれを蕩尽した人たちより、ずっと多くの賞賛を受けることができる（1715—20）ことを、グレゴoriusは認識していたからである。グレゴoriusが真剣なことを認めた僧院長は、ついに例の象牙板をグレゴoriusに見せてしまう。両親の罪を知ったグレゴoriusは激しく涙を流しながら嘆き悲しむ。神の恩寵を得るために僧院長はさらに重ねてグレゴoriusにこの島にとどまるよう忠告する。

>dâ von sô lâ dîn irrikeit
die dû an hâst geleit
unde diene gote hie.
Ja entübersach er dienst nie.
sun, nû stant im hie ze klage
und verkoufe dîne kurze tage
umbe daz ewige leben. <

(1791-7)

「その誤った道に進むことを
やめるがよい。
そしてここで神に仕えることにするがよい。
神は心から仕える者をお見捨てにはならぬもの。
神に対し、おのが罪の裁きをお願いし、
この地上の短い命を、
永遠の生命をあがなうため捧げるがよい。」

グレゴoriusは、しかし、この僧院長の宗教的な忠告を馬耳東風に聞き流したのみならず、象牙板に記された母の願いをも無視して、^{ふみ}文の最初にある高貴な生まれの部分だけに反応して、しかも豊かな財産ができたことも手伝って、騎士社会への憧れをますます強めてしまう。

>Ouwê, lieber herre,
jâ ist mîn gir noch merre
zuo der verte dan ê.
ich engeruowe niemer mê
und wil iemer varnde sîn,
mir entuo noch gotes gnâde schîn
von wanne ich sî oder wer. <

(1799-805)

「悲しいことではございますが、院長様、
世に打って出ようというこの望みは、
一層強まってしまったのでございます。
私はこの身がいつこの土地に生まれ、
だれの子であるのかを、
神の恩寵により知り得るまで、
憩うことなくさすらい探し続けるつもりです。」

騎士への憧れそれ自体は決して罪あるものではない。もともと彼が騎士の子であることを考えれば、彼が騎士生活に憧憬を抱くのも当然のことであろう。しかし、両親の忌まわしい罪を知ってしまった今、僧院長の宗教的な贖罪方法の助言を真剣に考えることもなく、騎士の道への憧れ（ritterliche gir, 1622）・功名心（cupiditas）・傲慢（superbia）⁹⁾をま

すまず強めて、騎士的名譽 (êre) のみへ執着したことによって、グレゴoriusもまた悪魔の奸計に落とし入れられることになるのである。この作品の根底には、上でも述べたように、悪魔が介在しており、登場人物たちの宮廷的動機に乗じて悪魔の意志が働きかけ、それによって罪が積み重ねられるのであり、罪にまみれて生まれたグレゴoriusも、僧院長の宗教的な贖罪の戒めを無視して世俗的名譽 (êre) を求めて騎士社会へ出かけてゆくというこの宮廷的動機によって、母と子の近親相姦というさらに恐ろしい罪を犯す運命に晒されたと言えるのである。

こうして冒険の旅へと出かけ、知らず母の国に到着したグレゴoriusは、名望を求める理想の騎士らしく、その国を荒らし女王を苦しめていたローマの大公を打ち倒し、その名譽は揺ぎないものとなったばかりではなく、女王と結婚してその国の支配者ともなる。彼は正しき裁き手であると同時に、その広い心ばえも人の知るところとなり (2257—8), およそこの世にあって、喜びに満ちた生活をもたらす^{もとい}基となるもののことごとくを所有する (2259—61)。だが、この幸も間もなく地におちる運命であり (2262), これも宮廷的動機に基づく結果であると言わなければならない。なぜなら、グレゴoriusは、自分の誕生の秘密は勿論のこと修道院の島に滞在していたことさえ秘密にしており、さらにこの母の国に来て毎日象牙板を読んで両親のための懺悔を行なっていることまでをもひた隠しにしているのであり、それは表面的な贖罪であり、彼は騎士世界における榮譽 (êre) のみを追求していて、真の贖罪に身を捧げてはいないと言わなければならないからである。また母側にしても、罪を犯してのちも続けてその国を支配している限り、真の懺悔者とは言えないのであり、さらにこの場合にもキリストとの婚約にもかかわらず国の存続のためという宮廷的動機に基づいて世俗の騎士と結婚したのだから、再度こうして悪魔の奸計に陥ることとなったのである。全てはこうしてグレゴoriusとその母との結婚へと運命づけられていたのであり、母はグレゴoriusの前でこう嘆くのである。

>sô hât uns des tiuvels rât

versenket sêle unde lîp:

ich bin iuwer muoter und iuwer wîp. <

(2602-4)

「私たちは身も心も、悪魔の計らいにより、滅ぼされているのです。

私はあなたの母であり、そしてあなたの妻なのです。」

こうして母から出発した秘密の鎖は、悪魔の企みにより人から人へと巻きついて、今やまた母に戻ってきたのである¹⁰⁾ が、しかし、宮廷社会における悪魔の作用を展開させるのがハルトマンの本来の意図ではない。なぜなら、二人が絶望の奈落の底に陥ってしまったあとで、詩人はグレゴoriusに、すぐさま母に向かって懺悔の忠告をさせているからである。この忠告は、K. D. ゲーベルが指摘しているように、かつて兄妹の近親相姦の際に老騎士が母に与えていた忠告と正確な対応関係——その忠告はいずれも別れに通じている——にあり¹¹⁾、個々の点において双方はほぼ同じ指示であると言えるが、しかしグレゴ

ーリウスの忠告においてはなお一層大きな懺悔の厳格さが語られている¹²⁾。母はこの国にとどまるがよいという同じ指示にしても、老騎士の忠告は国の存続という政治的な色調が強いのに対して、グレゴリーウスの忠告は徹底的な懺悔贖罪の色合いが強い。国の存続を望む老騎士の忠告が宮廷的動機に基づくものであるとすれば、国も財産もこの世への執着も断ち切った(2745—7) このグレゴリーウスの忠告は宗教的動機に基づくものであり、さらに次のような言葉から明らかなように、神の警告に基づくものであるとも言えるのである。

›niht verzwîvelt an gote :

ir sult vil harte wol genesen.

jâ hân ich einen trôst gelesen

daz got die wâren riuwe hât

ze buoze über alle missetât.

iuwer sêle ist nie sô ungesund,

wirt iu daz ouge ze einer stunt

von herzelîcher riuwe naz,

ir sît genesen, geloubet daz. <

(2698-2706)

「神の恩寵を疑ってはなりませぬ。

必ずや、あなたにも救いはあるのです。

どんな罪咎でも、まことそれを悔いるなら、

神はいつかはこれを贖罪と見なし給うとの、

ありがたいお言葉を読んだことがあるのです。

もしあなたのまなこが、いつか心からの後悔に、

涙にぬれそぼる時があるのなら、

あなたの魂はもはや救われ得ぬほどに

滅び去ってはいないのです。どうぞ私の言葉

をお信じ下さい。」

経験豊かな老騎士によっても口にされていないこの神の警告に基づく重要な忠告を、今やグレゴリーウス自身が与えるのであるから、グレゴリーウスは内面的にも浄化の兆しが見えてきたと理解してもよかろう。ここでグレゴリーウスには神を敬う心が生まれてきたのであり、神の恩寵を疑ってはならぬという認識に到達したグレゴリーウスには、今や真の贖罪の道が開けたのであり、自ら進んで贖罪の旅に出かけるのである。

従って、こうして苦難に耐えることを喜びとして再度自分の生国を出発することになったこの第二の出発は、捨て子として海に委ねられた第一の出発と好対照を成していると言えよう。第一の出発の際は海の波によって三日三晩ののちある小島の海岸にまで運ばれてきたのに対して、この第二の出発の場合は自らの足で茨の道を進んで三日目の日に漁師の小屋へ辿り着く。両者の場合に役割を演じているのが漁師である¹³⁾。前者の場合には二人の漁師によって小島まで運ばれたと同じように、後者の場合にも漁師によって岩へ連れられてゆくからである。こうして自らの国を出て滞在場所となる小島と岩は対応関係にある¹⁴⁾と言えよう。さらに前者の場合は漁師の妻の罵りにはグレゴリーウスは耐えられないほど恥辱を感じ、それがその島を出てゆくきっかけとなったのに対して、後者の場合には漁師の小屋に辿り着いた世捨人グレゴリーウスは今や真の懺悔者 (der riuwesære, 2780) なのであり、そこの漁師から罵られても、この悪罵を悲しみもせず、むしろ心軽や

かに聞く。漁師の嘲りを喜んで聞くのみならず、自らの罪を告白し、この罪を贖うのに恰好の恐ろしい場所を尋ね、その結果沖に浮かぶ荒涼たる岩にとどまることとなったのである。この著しい対照から言えるのは、宮廷的動機に基づいた傲慢な心は消え去って、今や彼は心から神に帰依し、宗教的動機に基づいた真の懺悔と贖罪の意志があるということなのである。

この敬虔な態度は、この孤岩で17年間過ごしたのちも変わることがない。神託を告げるべくローマから二人の使者がグレゴoriusを探してこの孤岩にやってきた場面からもそれは明らかである。事の次第を聞いたグレゴoriusは、まず罪を告白して、教皇にふさわしい身ではないと言って申し出を断わる。真の贖罪に身を捧げているグレゴoriusは、こうしてローマの使者たちと言葉を交わしたうれしさ楽しさをも、神の前に重ねて贖罪せねばならぬかと、恐れているくらい(3580—4)なのである。このグレゴoriusとローマ人たちの対話は、かつてのグレゴoriusと修道院長との対話と好対照を成していることが明らかである。僧院長との対話においては肉体的にも自らが騎士に向いていることをしきりに主張したのに対して、ここでは反対に肉体的にも教皇に適していないことを主張しているからである。言い換えれば、前者の場合にはグレゴoriusは騎士的名誉(êre)を求めてしきりにその島を去ることを主張したのに、後者の場合には神の榮譽(êre)のためにこの岩にとどまることを主張しているからである。今やグレゴoriusにとって大切なのは、世俗的名誉(êre)ではなく、神の榮譽(êre)なのである。奇跡的に発見された鍵を差し出されてその孤岩を去ることになったのも、それを神のみしるしだと信じたからである。さらに置き忘れていた象牙板の奇跡によって、グレゴoriusはローマの使者たちの願いを完全に承諾すると同時に真の聖者(ein sælic man, 3739)となったと言えるのである。修道院の島を去るときはその象牙板を読んで出発が決定的となったように、この場合も象牙板が出発を決定的なものにする役割を果たしている。しかし、前者の場合は出発がグレゴoriusの高慢な意志であったのに対して、後者の場合は神の意志によるものであり、この点に大きな相違があると言えよう。

ローマへの旅はこうして神の意志によるものであり、数々の奇跡によってグレゴoriusが聖者であることが証明される。教皇の座についてからも、グレゴoriusは、聖霊により教えられていた正しい節度(diu mæze, 3794)をもって、正しき道を守らんと熱心に努める。アキテーヌの地に暮らしていたグレゴoriusの母も、この新しい教皇の噂を聞いて、かつての罪を贖うためローマを訪れて、おのが罪を告白する。ここで以前の秘密のモチーフが告白のモチーフに取り替えられていることは明白である¹⁵⁾。以前母と子を取り巻いていた秘密のモチーフは災い多き再会に通じ、それは直ちに別離の結果をもたらしたのに対して、この告白のモチーフは幸せな永続的な再会に通じていると言えよう。婦人の懺悔を聞いたとき、教皇は直ちに彼女が自分の母であることを認めたのである。母と子の近親相姦後に行なった母の懺悔贖罪は、兄と妹の近親相姦を犯した後のいわば宮廷的な懺悔贖罪とは打って変わって、全く宗教的なものであることがテキストからも明白である。

敬虔な心正しき教皇グレゴリウスは、かつて命じた通りを母が完全に行なっていたことを神に感謝し、自らが彼女の息子であることを明かす。以前の国王としての地位はその国の秩序を乱し、母との別離をもたらしたが、今の教皇の地位はローマの民の神への愛をますます高めるとともに母との幸せな再会にも通じていると言えるのである。

このように母との再会でもって、グレゴリウスの罪も両親の罪も清められて、物語も初めて完結するのであり、母の存在は全体の構成にとって不可欠なものである。母と子の別れと再会を中心にして考えると、二重の近親相姦の構成は次のようにまとめることができるであろう。

A. 兄と妹の近親相姦 (母の懺悔贖罪——宮廷的・秘密のモチーフ)

1. 父王の警告⇒老騎士の忠告 (宮廷的動機→母との別離)
2. 僧院でのグレゴリウス
 - 漁師の役割 (侮辱に耐えられない)
 - 僧院長との対話 (高慢な心)
 - 象牙板→出発 (自らの意志)
3. 騎士としての活動 (宮廷的動機→母との再会)

B. 母と子の近親相姦 (母の懺悔贖罪——宗教的・告白のモチーフ)

1. 神の警告⇒グレゴリウスの忠告 (宗教的動機→母との別離)
2. 岩の上のグレゴリウス
 - 漁師の役割 (侮辱に耐える)
 - ローマ人との対話 (敬虔な心)
 - 象牙板→出発 (神の意志)
3. 教皇としての活動 (宗教的動機→母との再会)

Ⅲ. 作品の内容

以上見てきたように、二つの近親相姦の罪が犯されたあとの主人公たちの態度に注目すると、二人ともそれぞれにおいて全く対照的であることが一目瞭然である。一体、この対照的構成は作品の内容といかなる関係にあるのであろうか。

この作品の内容に近づくためには、まずこの二つの近親相姦の性格を正しく把握しておかなければならない。すなわち、第一の近親相姦は、初期スコラ哲学的な罪の規定によれば、意識的な罪であるがゆえにより厳しく感ぜられるべきものであるが、しかし、事実は全く反対であり、恐怖と苦しみは前者においてよりも後者の近親相姦においての方がはるかに大きいのである¹⁶⁾。これはなぜであろうか。それは意識的な前者の近親相姦に対して後者の近親相姦が無意識的であるからであり、まさにこの知ることなく欲することもない状態で犯してしまった罪こそ、外村直彦氏が述べておられるように、作品の核心である¹⁷⁾ と言えよう。この無意識的な行為によって罪に陥ったということから言われうるのは、人間は如何ともしがたい力によって常に罪の危険に晒されているということである。

ここにおいて詩人ハルトマンは彼の騎士叙事詩においては表現できない人間の罪への宿命というものを描こうとしたのだと言えよう。常に罪へと唆かす見えざる力がこの作品では悪魔として登場している。人間は無意識のうちに罪を犯すことがありうるのである。K. C. キングの言葉を借りて、人間は人間として活動したとき、罪に陥る¹⁸⁾と言ってもよいであろう。自らは責任のとりようのない両親の近親相姦から生まれたグレゴoriusは「原罪」そのものの象徴であると言ってよかろう。この罪はなるほど両親の側から言えば意識的に犯された罪ではあるが、グレゴoriusの側から言えば何の関係もない罪である¹⁹⁾。しかし、その恥辱から生まれたということでグレゴoriusはすでに罪深いものとなったのであり、その彼がまたもや何も知らずに近親相姦の罪を犯してしまうのである。従って、これもまた外村直彦氏の指摘であるが、この作品においては二つの知らず欲せずの罪が取り扱われており、それによって文学作品の構造は強められ、読者への作用は大きくされている²⁰⁾と言えるのである。

この二つの無意識的な罪がこの作品を支配していることから主張できるのは、罪がどこにあるかではなく、そのように無意識的に犯された罪がいかに大きかったかということが重要であるということであろう。この作品のテーマである神の恩寵の偉大さを示すためには、まずその罪がいかに大きかったかを描く必要があったのである。そしてそのように無意識のうちに大きな罪を犯してしまった人間がいかに贖罪するかがここではもう一つのテーマとなっているのである。宮廷的動機に基づいた贖罪はことごとく災いをもたらし、宗教的動機に基づいている贖罪が至福をもたらしていることは、上で述べてきた対照的構造から明らかである。すなわち、前者は罪への道であり、後者は至福への道である。この対照的二重構造における二つの道は、すでにプロローグでも広い道と狭い道としてほのめかされていた二つの道であると言えよう。広い海 (den breiten sê, 1823) を越えて出かけていった世俗社会への道は罪に通じていたのに対して、孤岩へグレゴoriusを連れてゆくことになる漁師の小屋に至る細い (smal, 2771) 小径は神の恩寵に通じていたからである。グレゴoriusがこの二つの道を順に歩んだということは、物語の対照的二重構造のほかに、誕生の際にグレゴoriusに与えられる「よき罪人」(der guote sündære, 671) という言葉からも明らかである。この逆説的言葉はグレゴoriusの歩む罪への道と恩寵への道をほのめかしていると言えるのである。しかし、ハルトマンはこの作品において宗教的な道を騎士的な道よりも優位に立たせることによって、騎士道を批判しているわけでは決してない。また反対に岩の上での宗教的生活は、罪を清めるための前提とは言え、ハルトマンの求める世界であるとは言えない。騎士的名誉のみを求めた世界は罪の危険に晒された世界であり、一方孤岩での生活はまさに「鍵」で閉じこめられてしまった世界なのである。では一体、この作品の中でハルトマンが求めている世界とは何なのであろうか。ハルトマンはグレゴoriusと僧院長との対話においてまさにその両者の道の調和的結合を望んでいたのではないだろうか。騎士の道を正しく行なうならば、至福にも至りうる (vgl. 1531-3) と信じていたのである。しかし、「いつわりの聖職者」(ein betrogen klô-

sterman, 1535) を避けて「神に仕える騎士」(gotes ritter, 1534) になろうとしたグレゴリーウスはその「節度」(die mæze, 1532) を忘れて、傲慢な心にとりつかれて、実際には「いつわりの騎士」(ein betrogen ritter)²¹⁾ になってしまったのであると言わなければならない。「いつわりの騎士」は一度滅びて生まれ変わらなければならない。恐ろしいほどに身と魂を危険に晒すことで、風雨霜雪によってその汚れた罪を清める必要があったのである。危険に晒された魂の状態を極限にまで追いつめ、それを克服することによって、汚れた身を清めようとするその極限の状態が岩の上での17年間もの厳しい苦行なのである。この極限の状態の世界の戸をその「鍵」でもって開け給うのが神であり、生まれた瞬間からおよそ17年間²²⁾ 背負い続けてきたもろもろの罪を厳しい苦行によって贖おうとしているグレゴリーウスの中に真の敬虔な心 (diu geistliche triuwe, 125) を認めた神は17年目にしてその戸を開き給うたばかりか、二つの道を体験してきたグレゴリーウスを教皇にも選び給うたのである。まさにこの「教皇」とそハルトマンの求めてきた理想の調和的世界の象徴であると言えよう。「教皇」は、すなわち、かつて言い争ったグレゴリーウスの騎士への憧れ (gotes ritter) と修道院長の宗教的忠告 (gotes kint) との調和的発展的結合であり、罪にまみれて騎士社会に生まれたグレゴリーウスが到達すべき理想の調和的世界だったのである。この理想の世界に到達するためには、傲慢な心を捨て去って、神に帰依する心を持ち、神の恩寵を疑わないで、罪の裁きを神に委ねることが必要だったのである。その意味において孤岩での17年間の苦行は、調和的世界に到達するための必要不可欠な前提である。これまで世俗的な誉れ (der werlde lône, 4) を求めてきたハルトマンは、自らの目指す理想世界へ到達するためにはここで是非とも神の恩寵を問題にしてみなければならなかった。中世世界にあっては宗教的なものと騎士的なものとは切り離せないほど相互に大切なものであり、宗教的なものが加わることによって初めてまた真に騎士的だとも言えるのである。この宗教的なものと騎士的なものとが調和を保つところに作者ハルトマンの理想があると言えるのであり、その騎士叙事詩「エーレク」で世俗的な名誉を追求してきた彼は、今や宗教的な名誉を求めているのである。こうした意味でこの作品は特に宗教性の意味を追求した作品であり、ここにこの作品の意義があり、詩人ハルトマンの目指す理想世界に到達するためには是非とも一度は通らねばならぬ宗教的過程の一つだったのであると結論づけることができよう。

※テキストは》Hermann Paul (Hrsg.): Gregorius von Hartmann von Aue. 13., neue bearbeitete Auflage besorgt von Burghart Wachinger. (Altdeutsche Textbibliothek Nr. 2) Tübingen 1984. 《を使用し、邦語訳は中島悠爾氏の訳(郁文堂刊「ハルトマン作品集」1982年)を引用させて頂きましたが、字数の都合で表現を変えさせて頂いたところもあることを付記しておきます。

注

- 1) Anton E. Schönbach: Über Hartmann von Aue. Drei Bücher Untersuchungen. Graz 1894. S. 113.
- 2) この罪の問題の研究状況は次の研究論文に要領よくまとめられている。なお、その他いろいろな点においてもこの三つの研究論文は、多くの示唆を与えてくれたことを付記しておきたい。
Wolfgang Dittmann: Hartmanns Gregorius. Untersuchungen zur Überlieferung, zum Aufbau und Gehalt. Berlin 1966.
Naohiko Tonomura: Zur Schuldfrage im ‚Gregorius‘ Hartmanns von Aue. *Wir-kendes Wort* 18, 1968.
K. Dieter Goebel: Untersuchungen zu Aufbau und Schuldproblem in Hartmanns ‚Gregorius‘. Berlin 1974.
- 3) W. Dittmann: a.a.O., S. 203.
- 4) Gabriele Schieb: Schuld und Sühne in Hartmanns Gregorius. *Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur* 72, 1950. S. 57.
- 5) Hildegard Nobel: Schuld und Sühne in Hartmanns ‚Gregorius‘ und in der fröhscholastischen Theologie. *Zeitschrift für deutsche Philologie*. 76, 1957. S. 73-79.
- 6) Ebd., S. 72.
- 7) W. Dittmann: a.a.O., S. 209.
- 8) 二重の近親相姦については拙稿: ハルトマン・フォン・アウエの「グレゴorius」(徳島大学教養部紀要—人文・社会科学—第20巻1985年) に詳しく述べてあるので、参照のこと。従って、本稿は上記の拙稿と重複する点の多いことを付記しておく。
- 9) Peter Wapnewski: Hartmann von Aue. Stuttgart 1962. S. 98.
- 10) K. D. Goebel: a.a.O., S. 25.
- 11) Ebd., S. 15.
- 12) Ebd., S. 39.
- 13) Vgl. ebd., S. 17.
- 14) Vgl. ebd., S. 16.
- 15) Ebd., S. 23.
- 16) Vgl. ebd., S. 95.
- 17) N. Tonomura: a.a.O., S. 10.
- 18) K. C. King: Zur Frage der Schuld in Hartmanns Gregorius. *Euphorion* 57, 1963. S. 65.

19) N. Tonomura: a.a.O., S. 11.

20) Ebd.

21) Vgl. H. Nobel: a.a.O., S. 75.

22) 拙稿：前掲論文における注27) を参照のこと。